

皆の広場

素人の歴史考⑤「南九州の古代史」

自文科 永野 徹

(1)南九州探索ルート図



(2)南九州(ハヤト)の歴史

1)はじめに

①南九州とは

地形 海と山・火山に囲まれているのが南九州。

南九州は空から見ると「西の薩摩半島」と「東の大隅半島」から成り、その間が桜島のある鹿児島湾。また大隅半島の東部には志布志湾。二つの半島の大和朝廷対応には歴史的にかなり差異が見られる。

火山活動 この地域火山活動が桜島・霧島等で今も継続している。

と農作 ・約2万4千年前に始良(アイラ)カルデラが噴火100mのシラス台地が残る。
・約6千5百年前に鬼界(キカイ・硫黄島)カルデラが噴火しアカホヤ火山灰。
・池田湖(約4千5百年前に噴火して出来たカルデラ湖)

従って、低地の多くは火山性土壌で保水力が弱く農耕に不適である。にも拘らず、稲作は早い時期に伝来していて少しは稲作遺跡もある。江戸時代・備中国の古川古松軒が薩摩を旅した著作「西遊雑記」で「國中八分は山にて、其の山なり押ししぎしように山の頂平なる故に、

それを開いて畑をなし雑穀を作る」と記しているように今でも耕地の三分の二は畑地でシラス台地の三大作物であるさつまいも・大豆・なたねなど雑穀が主体である。生活が維持できるのは温暖な気候と豊富な降水量に左右されるというように自然条件には恵まれているようで意外と厳しい。

大和朝廷 4～5世紀ヤマト王権と日向・諸県君との間に緊密な関係が有った。
(諸県君) 日向・諸県君の娘は応神(泉長媛)、仁徳(髪長媛)の妃となる。

モロガタキ

②クマソとは・南九州の反ヤマトの代表クマソ・ハヤトについて以下に考察してみる。
熊襲とは 学界では「肥後の球磨クマ」と大隅の「贈於ソオ」の地名を続けたものがクマソとの考え方が通説となっており地域名・部族名とされている。乃ち「球磨贈於」を簡略したものではないか(球磨贈→熊曾→熊襲)球磨郡は現在の熊本県人吉市を中心とした球磨川上流地域で贈於郡は鹿児島湾奥部の国分市・始良(アイラ)郡辺りと比定されている。
熊襲 鹿児島湾奥部には熊襲と呼ばれる贈於(曾)君一族が蟠踞していた。
贈於君 曾一族は養老期の隼人大抗戦に見られるように概して反政権的
ソノキミ である。贈於(曾)君勢力圏に高塚古墳が築造されていない事からも反ヤマトで大隅直一族とは好対照である。

贈於(そお・曾)君が文献に見えるのは八世紀初めになる。

(喜田貞吉・津田左右吉氏が風土記に基づき「球磨贈於」説を提唱)

クマソ説 ①喜田貞吉・津田左右吉:風土記(925?)クマ=球磨、ソオ=贈於クマソ説

②3世紀の魏志倭人伝にある狗奴国説(クマソ=球磨・阿蘇)

③直木説:神功皇后のモデルは斉明天皇で白村江で敗戦(663)

(仲哀、神功の熊襲征伐はクマソが新羅と結びついているのでは)

球磨(熊) 球磨地域は4,5世紀には高塚古墳が築造されている。例えば錦町の亀塚古墳群、免田町の才園古墳群、多々良木町の赤坂古墳群など。

贈於(曾) 贈於地域は鹿児島湾に注ぐ天降川があるが高塚古墳も装飾古墳も存在せず、僅かに国分市の亀の甲遺跡がある程度。

この両地域に大和政権が進出した証しは7世紀後半以降。

クマソの反乱 記紀によると、熊襲の反乱は景行・仲哀天皇と神宮皇后時代であり四世紀末から五世紀前後と推定される。それ以前に部族形成された事になりこの頃に日向で前方後円墳の代表的な高塚古墳が築造されている。大淀川水系の生目古墳群とか一ツ瀬川水系の西都原古墳群等が該当する。この時期には地下式横穴墓は存在しない。
日本書紀 景行12年～19年まで約8年間、景行天皇が都を出発して九州東岸の部族を討ち南下して熊襲タケルを平定して帰路は九州西岸を北上し九州各地の豪族を服従させて都に帰ると言う壮大な熊襲征伐伝が日本書紀にある。その八年後再び熊襲がそむいたのでヤマトタケルが熊襲征伐に向かった事になっている。

古事記 景行天皇が長子・大碓尊が朝食に出てこないののでヤマトタケル(小碓尊:オウスミコト)に食事に出るように伝える事を命じた所、その返事が「朝署に厠に入りし時、待ち捕まえて、掴み拉ぎてその枝を引きかき、薦に包みて投げ棄てつ」と殺害してしまったと余りに凶暴な性格に驚きヤマトタケルに熊襲征伐を命じたとある。

クマソ征伐 記紀等によるクマソ征伐記事は以下の通り。。

・景行天皇・ヤマトタケル尊のクマソ征伐

・仲哀天皇・神功皇后時代に対韓・熊襲征伐(4世紀頃?)

・応神朝・仁徳朝時代(4世紀末～5世紀初)宋書に衆夷征伐

前方後円墳 4世紀の南九州では前方後円墳として宮崎市の大淀水系の生目古墳、一ツ瀬川水系の西都原古墳群が築造され始めていた。この頃まだ南九州特有の地下式横穴墓は築造されていない。

③ハヤトとは

名 称 クマソが消えたあとで、ハヤトが現れる。

隼人の呼称は七世紀後半の天武朝の頃からである。

記紀の扱いは「隼人とは」南九州の住民程度の認識であったかも。

薩摩は地形的に大隅半島と大隅半島が南に張り出しておりハヤトには

親ヤマト派の「大隅ハヤト」と反ヤマト派の薩摩側の「阿多ハヤト」があった。
その内、近習隼人は親ヤマト派の大隅直(オオシ・アガタ)一属か？

ハヤト説 隼人の呼称；

- ①本居宣長は「性行説・早人」としハヤトの名称を敏捷性を根拠とする。
- ②喜田貞吉は「地名説・波邪」とし邪古と多嶺(ネ)の中間地点が波邪。
- ③その他説： 嚙子人(ハヤシト)、吠人(ハイト)、南方(ハエ)
- ④駒井和愛：方位説(中国四神で東西南北を青竜・白虎・朱雀・玄武)
中国古典「周礼」で朱雀は「鳥隼(チョウシュン)即ち隼の事。

記紀の記載

古事記・日本書紀には5世紀前後畿内王権に近習「隼人」が登場。
・履中天皇の弟・住吉仲皇子に「近習隼人」刺領布(サシレ)が仕える。
・5世紀末・雄略天皇陵墓で泣き叫ぶ哀号(オラフ)近習隼人。
・6世紀末頃敏達天皇の葬儀で殯宮(モカリミヤ)を兵衛し守護した隼人。

ハヤト登場 ハヤトが文献に登場するのは天武11年(682)からである。

「隼人、多く来て、方物を貢ぐ。其の日大隅ハヤトと阿多ハヤトと朝廷に
相撲とる。大隅ハヤト勝つ。」(天武朝に朝貢したと日本書紀にある)
乃ちハヤトが地方の産物を持って朝貢して相撲と言う神事を奉納した。
其の後持統朝でも持統三年(689)に筑紫大宰府の栗田真人經由で
「隼人174人、併せて布五十常、牛皮6枚、鹿皮50枚を献る」とある。

仏教の弘布

持統6年(692)には筑紫太宰率河内王などに詔して「沙門を大隅と
阿多とに遣わして仏教を伝うべし」とハヤトの教化・懐柔に仏教を利用
する事を試みている。

(参考) 天武朝では四神思想が強く意識され南九州の住民を「隼人」と呼ぶ
四神思想 ようになった。天武元年に赤雀が献上されて朱雀元年、二年に白雉
(天武朝) が献上され白鳳元年、十五年に赤雉が献上され朱鳥元年と瑞祥年
号が定められた。

隼人 南方の守護神「朱雀」が中国の古典「周礼」によれば「鳥隼」(チョウ
シュン)乃ち「隼」が描かれた赤い軍旗に由来するのか。その結果
隼(ハヤフサ)＝隼人＝早人＝ハヤトの起源ではとの見方が強い。

ハヤトの起源 中国には中華を中心に蛮人を四方に想定する考え方がある。(東
夷、西戎、南蛮、北狄)。天武朝は是を仮託して南隼人・北蝦夷・南
墮羅等四神思想から南・朱雀をハヤトに仮託したとの駒井説がある。
(周礼)「鳥隼を旗(よ)となす」「鳥隼は其れ勇捷を象どる也」旗(よ)
とは隼を描いた赤旗で、勇捷・敏速な行動を表象する軍事行動乃
ちハヤトは「天皇の兵衛として昼夜の守護人」と同一視されていたと
思われる。(天武天皇の頃)

天武朝 四神思想は八世紀初頭に朝廷上層部に定着していたと思われる。
(8世紀) 「続日本記」大宝元年(701)年正月条に次の記載あり。
「天皇(天武)、大極殿に御しまして朝賀を受けたまふ。その儀、正門
に鳥形の幢を樹つ。左は日像・青竜・朱雀の幢右は月像・玄武・白虎
の幢(はた)なり。蕃夷の使者左右に陳列す。文物の儀是に備れり。」

四神遺跡等

四神像を描いた最古の遺構は福岡県鞍手郡若宮町にある「竹原古
墳」で6世紀後半築造とされ、七世紀後半・白鳳時代には「奈良薬師
寺本尊台座の四神図」、明日香村の「キトラ古墳」等有る。

④薩摩ハヤト

薩摩ハヤトは大きく2つのハヤト族(「大隅隼人」と「阿多隼人」)で構成
される。大隅ハヤト拠点：大隅半島の志布志湾西部河口の肝属川中・
下流域阿多ハヤト拠点：薩摩半島の西岸河口にある万之瀬川下流域

大隅半島 隼人(ハヤト)は古代南九州の住民。名称は当時の中央政権側の名称。
(大隅ハヤト) 7世紀後半の天武朝で既に大隅ハヤト、阿多ハヤトが登場する。8世紀
薩摩半島 には薩摩ハヤトの名称が見られる。史書ではハヤト以前にクマソが居たと
(阿多ハヤト) 言う。5世紀頃の南九州とヤマト朝廷との関係では南九州東部の大隅
側と西部の薩摩側で対応が全く異なる。(大隅側が親ヤマトで薩摩側
は反ヤマト。)南九州の中央部、鹿児島湾沿岸部にはヤマトの影響が

ある高塚古墳が殆ど存在しない。

大隅直 大和政権と日向の諸県君とは同盟関係にあり大隅側はその影響下。

諸県君(もろかたきみ)、泉長媛(イズミナガヒメ)

(オオスミガタ) 4世紀初、応神天皇は日向の泉長媛を仁徳天皇は諸県君の髪長媛を后としその娘・幡梭皇女も雄略天皇の妃となり、大和政権と深い繋がりが見られ、この日向・諸県一族が5世紀頃に大隅の志布志湾に進出して大隅直一族と結ばれたのではと言われる。

阿多君 薩摩半島西岸部に河口を持つ万之瀬川下流域を本拠とするハヤト。
(アタノキミ) 阿多一族の祖は日向神話に登場する海幸彦(ホテリノミコト)とされ海とのかかわりが濃厚であるが陸上活動の痕跡は希薄で高塚古墳などの分布圏外にある。

⑤南九州の墓制

墓制 南九州の中央部、鹿児島湾沿岸部一帯に高塚式古墳が殆ど存在しないが、珍しい事に薩摩半島先端部・指宿に高塚古墳の南限となる弥次ヶ湯古墳が最近見つかったとのこと。

薩摩半島西岸部では高塚古墳も地下式墓も殆ど見い出されないことは一考を要する。

南九州の古墳時代には、この地域特有の地下式板石積石室墓があり、地下式横穴墓と土壌墓がある。両地下式は構造・副葬品・規模は多様であり、なぜ地下に遺体を埋葬されたのかは解らない。

地下式板石積石室墓は地下2m程度の所に円形又は方形の石室が造られる。床面周囲には一辺数十センチほどの板石が建てられその上を持ち送り式で板石で覆い封土されていたと思われる。

この墓制が五島列島でも八卦されていることから、朝鮮半島・北九州の支石墓・箱式石棺とのつながりも示唆されている。

以下ヤマト等の高塚式古墳の影響が少ない南九州独特の墓制。

地下式板石積石室墓 この墓制は4世紀から7世紀にかけて見られ地下式横穴墓と重複する。地表面下約2m前後の所に床面が円形又は方形の石室が造られ、その上を数十枚の板石で持ち送り式に覆った石室墓で中央部が亀甲上に高くなっている。其の地表面は平坦で現在は畑地などに使用されている。

地下式板石積石室墓は南九州の西部、川内川の中上流に分布し北は球磨川流域や八代海沿岸部にも見られる。

鹿児島県薩摩郡鶴田町の湯田原古墳には封土も残っている。

地下横穴墓 この墓制は5～6世紀が盛期で8世紀造りもある。板石積石室より始期、終期が遅れ分布は高塚古墳と重複する。(イタノスミセキツ) 地表面から1.5m位縦穴を掘り下げ、その後横に水平に堀広げる。水平部分は通路(羨道)のおくに内奥部(玄室)がある。

地下式横穴墓の分布は南九州でも南東側で、北は西都原古墳群、東の志布志湾沿岸部、西の川内川上流にも見られる。

土壌墓 土壌墓は地下に穴を掘って直接死体を埋葬したもの。南九州には薩摩半島南部を中心に分布する土壌墓がある。代表的のものとして指宿の成川遺跡(4c～6c)がある。鹿児島湾奥部の国分市・亀の甲土壌墓は朝鮮半島南部の古墳から出土する大刀が埋設されていた事が注目される。

(参考)

西都原古墳 日向の西都原古墳群は4～7世紀に築造されて、前方後円墳32基、
サイトバルコフ 円墳278基、方墳1基、地下式横穴墓10基、横穴墓12基の合計333

(日向) 基が存在する。ヤマト王権の勢力波及を示す高塚古墳だけで300基を越す例は全国的に見ても珍しい。中でも女狭穂塚(176m)、男狭穂塚(148m)等は九州最大規模の前方後円分である。(メサホツカ)

2)薩摩半島

①稲作遺跡(農耕不適地域)

・鹿児島の農業産物の収穫量は近畿のほぼ半分以下である。薩摩

高橋貝塚 西岸の鹿児島県日置郡金峰町にある高橋貝塚からは縄文晩期から弥生時代前期の層で稲作の痕跡あり。

京田遺跡 鹿児島県川内市の京田遺跡からは弥生時代の層から木製農具・高床倉庫の部材が見つかった。

②一般遺跡

橋牟礼川 鹿児島県指宿市の橋牟礼川遺跡は貝塚形成が縄文時代から平安時代まで続いている。畑では穀物を栽培していたようである。

上野原 国分市の上野原遺跡は縄文遺跡で現代でも畑作が行われている。

③古墳 薩摩半島の肥後側、薩摩北西部海岸寄りに天草南端の長嶋、対岸の阿久根市一帯に高塚古墳がある。4世紀前半に阿久根市には大隅・薩摩領域で最古の鳥越古墳がある。阿久根には他にも脇本古墳が有るがこれ等は肥後から諸豪族の南下を示すもので中央部より南には殆どない。薩摩半島根本の川内川流域には5世紀以前の高塚式古墳が分布する。珍しい事に薩摩半島先端部・指宿に高塚古墳の南限となる弥次ヶ湯古墳が最近見つかった。

④薩摩ハヤト

薩摩側では肥後の豪族肥君一族が薩摩北西部に勢力を伸張して長嶋を中心に高塚式古墳が分布している。8世紀天平期には出水郡の大領に肥君の名が残る。薩摩中央部を貫流する川内川下流には高塚古墳が分布する。5世紀代の船間島古墳は直径17mの円墳で竪穴式石室がある。薩摩中心部、川内川流域には薩摩の君一族が蟠踞していた。続日本記に肥君(ヒノキミ)の名が有る。7世紀末に巫女集団が覓国使(べっこくし)を剽劫(ヒョウキョウ)したとの記事が有る。

薩摩君 薩摩南部半島西岸部の万野瀬川流域には阿多君一族が勢力を張っていた。阿多君一族は日向神話にも登場するホテリミコ・海幸彦を祖とする海との関係が深い一族。

阿多君 (アタノキミ)

西岸部 薩摩半島西岸部は7世紀頃から阿多一族の存在が明確になる。現在の加世田市・日置郡金峰町一帯が本拠地で海洋性に富む一族である。縄文時代晩期に新潟方面から？この地方にヒスイが持ち込まれている。金峰町の高橋貝塚からは稲作文化の痕跡と九州で最も古い時代の鉄製品が出土している。

海洋性 更に高塚貝塚からは南島交易の拠点を示す大型貝類の遺跡が出土し、貝輪状に加工して装飾品として北九州・瀬戸内海沿岸と交易していたようである。

薩摩半島西岸部から支石墓・甕棺墓が出土する事から沖縄等南島と北九州との交易交流があったのではと推測されている。

(3)大隅半島

①熊襲 鹿児島湾奥部には熊襲と呼ばれる贈於(曾)君一族が蟠踞していた。

鹿児島湾 贈於(曾)君が文献に見えるのは8世紀初めになる。

曾一族は養老期の隼人大抗戦に見られるように概して反政権的。贈於(曾)君勢力圏に高塚古墳が築造されていない事からも反ヤマト。

②古墳 5世紀頃の大隅側を代表する豪族は志布志湾河口肝属川流域に本拠のある大隅直(オオスミアガタ)一族である。この周辺の唐仁大塚・横瀬は夫々全長が180m、150mもある当時の最大級の前方後円墳である。大隅にこのような大きな古墳が存在するのはヤマトの影響下にある日向に隣接しているからであろうと言われている。

4c~5c 日向には4世紀代に大和の柳本・佐紀と並ぶ全長140m級の生目古墳群がある。

③大隅ハヤ 大隅直(オオスミアガタ)一族は親大和王権的である。大隅側は大和政権と日向の諸県君との同盟関係の庇護下にある。4世紀初、応神天皇は日向の泉長媛を仁徳天皇は諸県君の髪長媛を后としその娘・幡梭皇女は雄略天皇の妃となり、大和政権と深い繋がりが見られ、この日向・諸県一族が5世紀頃に大隅の志布志湾に進出。

(4)大和朝廷の蕃夷(ハヰイ)対策

天皇号 天武・持統朝では律令国家成立に向けて諸政策が進行していて南日本国制定の隼人対策、北の蝦夷対策として朝貢を強制する方策が執られた。対外・国外の危機を乗り越えるために、天武朝において天皇中心の律令国家体制づくりが進んだ。乃ち「大王から天皇」、「倭国から日本国」へと天皇号・国号が天武朝で成立した。

日本国制定 中国の唐帝国に倣って大宝律令に直結する最初の体系的法典として飛鳥浄御原律令が制定された。

蕃 夷 日本で代表的な蕃夷(化外民ケイミン)とはハヤトと蝦夷を指す。

朝貢と移配

大和P朝廷は化外民(ハヤト、蝦夷等)を徳化する為に朝貢を強制する一方で、勢力弱体化のために原住地から他地に集団移動させると言う「移配」措置を行った。畿内に移住させた集団を更に移動配置もさせている。

ハヤトの畿内移住は5世紀頃から始まり、集団的強制移配は7世紀後半に始まった。ハヤト移配地は山城国綴喜郡大住郷と奈良三山・耳成山東側の大隅集落などが該当する。

朝貢旅程と負担 天武朝で大隅ハヤト、阿多ハヤトが朝貢する旅程は延喜式によると耳成山約40日を要したとされており相当な負担であった。

筑後大宰府

大宰府は7世紀初頭の推古朝頃に現れ、対外関係の業務に当たっている。7世紀後半には筑後ばかりでなく吉備、周防、伊予など瀬戸内海沿岸部に「太宰」が置かれた。やがて大宝律令、養老律令になると筑後のみに置かれるようになる。筑後大宰府は西海道を統治する大和の出先機関として「遠の朝廷」の性格を帯びようになり、大宰府はハヤトの支配や朝貢の媒介等の機能を果たすようになった。それに伴い中央政権は国司・郡司の詮衡を大宰府に委譲している。

律令制度

九州(9国) 大宝2年(702)の記事では「筑後七国」と記載されているが、肥後から薩摩国が、和銅6年(713)には日向から大隅を分立して、筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後・日向と合わせて「筑後9国」=九州となった。

薩摩・大隅 文武朝の頃に「肥後国から薩摩国を」、「日向国から大隅国を」分立した。

薩摩国誕生 まず薩摩の新地・川内川北側に肥後国からの移民による国府を設置して、川内川南に拠点のある薩摩の君一族の分断を図った。「薩摩・多禰、化を隔てて命に逆らふ。是に兵を発して征伐し、遂に戸を校べ吏を置く。」(大宝2年・702年と文献にある)

この意は薩摩・多禰が天皇の徳化に従わず逆らったので兵を発して征伐した。その後、戸籍を登載させ役人(国司)を置くことになった。「是より先、薩摩隼人を征する時、太宰所部の神九處に禱祈する。實に神威に頼りて遂に荒賊を平らぐ。」

大宰府の指揮下で薩摩の帰順化が推進されたようである。

大隅国誕生 同様に、大隅国においても和銅6年(713)記事で、「日向国の肝付・贈於・大隅・始禮の四郡を割きて、始めて大隅国を置く」とある。大和朝廷の理不尽な性急な支配に抵抗して養老4年(720)「大隅国国司殺害事件」が発生した。

隼人の反乱

大宰府から朝廷への飛駅の急報記事
「隼人反きて、大隅國守陽侯史麻呂を殺せり」
朝廷は中納言大友旅人を征隼人持節代將軍として派遣して1年半後に、多数の使者・捕虜と被害を出してようやく平定。
「斬首、獲虜合わせて千四百余人」

蝦夷の反乱 同年・養老4年(720)に東北・陸奥國でも反乱が発生している。
「蝦夷反き乱れて、按察使(アゼチ)正五位上上毛野朝臣廣人を殺せり」と急報が届き多治比真人タジヒマヒト・阿部朝臣駿河を派遣。